

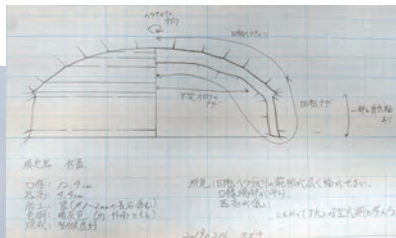


世界遺産の宝庫、奈良で本物に触れながら、文化財専門職を目指す

奈良大学 文学部 文化財学科

タイの水中遺跡保存のために、日本の保存技術を生かしたいです

タイに2度行き、現地の壁画などの文化財や、水中遺跡発掘現場を見学。沈没船から出土した陶磁器の保存を卒業研究のテーマにしました。日本の文化財の保存技術を世界で役立てたいと思っています。(島袋さん)



発掘調査して出土した遺物を自分の手で計測します

須恵器(*1)について研究中です。出土した土器は、外形を実測して(写真左)図面(写真右)にします。それを基に、作られた時代を特定することが考古学の醍醐味の1つです。(鈴木さん)



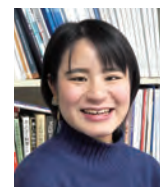
遺物の保存には、分析機器や薬剤の知識も必要です

卒業研究では、水中から出土した陶磁器の修復にはどの保存方法が適しているのかを繰り返し実験。結論を導くためには、粘り強い作業が必要であることを実感しました。(島袋さん)

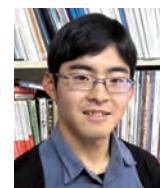
1年次から本物の文化財に触れながら学ぶ

世界遺産や国宝など、文化財の宝庫である奈良。奈良大学文学部文化財学科は、そうした立地を生かして文化財を幅広く学び、守り、生かし、後世に伝える人材を育成している。これまで全国最多の700人以上の学芸員・文化財専門職員を輩出してきた実績を持つ。

同学科には、「考古学」「美術史学」「史料学」「保存科学」の4つのコースが設置されている。1、2年次はコースに分かれず、4分野について広く学ぶ。カリキュラムで重視されているのが、本物の文化財を題材として研究を行う「現地・現物主義」だ。



文学部
文化財学科4年
島袋花子
しまぶくろ・はなこ
沖縄県立 球陽高校卒業。
神社仏閣の保存・修復に
興味があり、同学科に入学。



文学部
文化財学科4年
鈴木郁哉
すずき・ふみや
静岡県立 島田高校卒業。
社会や歴史への関心が高く、
同学科に入学。

*プロフィールは2019年3月時点のものです。

*1 古墳時代(5世紀前半)に朝鮮半島から伝わった技術を使って焼いた土器。丘陵の斜面をくりぬいた窯の中で高温で焼かれたため、それまでの野焼きによるものと比べて、硬く焼き締まった土器であることが特徴。

1年次の基礎科目からその精神を重視した教育が行われている。文化財学科4年の鈴木郁哉^{ふさや}さんは、こう振り返る。

『考古学概論』では、奈良県内の遺跡を見て回り、『美術史概論』では、毎週のように美術館・博物館で絵画や仏像を観察しました。1年次から様々な文化財に直接触れることで、文化財を学問的に見る目が鍛えられました」

文化財専門職を目指す学生が全国から集まり、主体的に学ぶ

同学科で特徴的なのは、文化財に関連する仕事したいと明確な目標を持って入学する学生が多く、主体的に学ぶ風土が根づいていることだ。鈴木さんは、1年次から「考古学実習室」で行われる自主ゼミに参加。有志の学生が、同学科で発掘した遺物の整理作業を行っている。

「発掘された土器の破片の色や口縁部分の模様から、作られた時代を特定する先輩方を見て、自分もそうなりたいたと感じました。先輩に誘われて、平城京跡の発掘に参加するなど、1年次から現場で作業することを通じて、学びたいことが絞られて

いきました」(鈴木さん)

島袋花子さんは、2年次から今津節生^{せうせい}教授の研究室を訪ねている。

「私は沖縄県出身のため、水中遺跡に興味がありました。今津教授の『保存科学講読』の授業で、陸上より水中の方が出土する遺物が多いことを知りました。タイの水中遺跡の現地視察にも同行させてもらい、さらに関心が高まり、3年次から今津研究室に入りました」(島袋さん)

実習で実物に触れて学び、研究手法を確かなものにする

3年次から専攻コースごとに専門的な実習が行われる。保存科学コースを専攻した島袋さんは、「保存科学実習」で木材や金属などの保存技術を学んだ。

「遺物の色や形が変わらないように保存するために、特別な溶液で含浸^{しん}(※2)する作業をします。材質によって適切な溶液やその濃度が異なり、木材は収縮率なども考慮しなければなりません。数学や化学の知識を大学でこれほど使うとは思っていませんでした」(島袋さん)

考古学コースを専攻した鈴木さんは、須恵器を研究している。

「卒業研究では、奈良近郊で発掘された初期須恵器に絞って、形状ごとの分布などを調べました。一つひとつの史料を地図上に示していくと、地域によって祭司用が多いなど、使われ方に差があることが分かった時は、大きな達成感がありました」(鈴木さん)

世界遺産で学芸員実習を行うなど、現地・現物で学ぶ

学芸員の資格取得に必要な「博物館実習」は、奈良県内の博物館で行われる。島袋さんは、世界遺産である春日大社国宝殿で、鈴木さんは奈良県立橿原^{かしはら}考古学研究所で、1週間の実習に参加した。

「展示物の日本刀の手入れの方法を学びました。保存方法についてより詳しく学べたほか、展示の工夫も知ることができました」(島袋さん)

今後、2人ともに同大学の大学院に進んで、研究を深めるといふ。

「卒業後は、実際に遺跡発掘にかかわれる文化財専門職を目指したいと思っています」(鈴木さん)

「水中考古学の研究を深め、博物館などで保存・修復にかかわる仕事がしたいです」(島袋さん)

大学の思い

マネジメント力を備えた文化財のスペシャリストに



文学部
文化財学科教授
今津 節生
いまつ・せつお

本学科は、1979年に日本で初めての文化財学科として創設されました。総合的に文化財学を学べるカリキュラムを用意しています。

最も重視しているのが「マネジメント力」の育成です。例えば、博物館に就職したら、展示物すべてを把握しなければならぬため、自分の専門分野以外の文化財に関する知識や技術も求められます。加えて文化財を守る法律の知識、市民のみなさんとのコミュニケーション力も必要でしょう。そうした現場で求められる実践力を、体験的に身につけられるようにしています。

また、学外にも学びの場があります。文化財専門職として就職した先輩のネットワークを生かして、先輩が調査にかかわる発掘現場や博物館でアルバイトをする学生も少なくありません。

今後、力を入れていきたいのが、文化財の防災についてです。阪神淡路大震災以降、文化財を通じた文化の復興も重要視されています。文化財が被害に遭った際、即座に行動ができるような文化財のスペシャリストを育成していきます。

※2 木材や金属などに、薬品や樹脂、水などの液体を浸して含ませること。